

サッカーの技術的特質に関する一考察

佐藤 亮平¹, 近藤 雄一郎²

A study on the technical characteristic of Soccer

Ryohei Sato¹, Yuichiro Kondo²

Abstract

This study aims to re-examine the technical characteristics in soccer, a concept first proposed by Araki (1974). Previous studies were examined to determine the achievements as well as the research problem. Studies by School Physical Education Research Association of Kindred Spirits (1974, 1975), Ito and Takeda (2008), and Sato and Takeda (2011) were reviewed. Based on this, this study configured the technical characteristics have been proposed by Takeda (2010) and Kondo (2013). As a result, we find that previous studies were able to present the system and the significance of legs in soccer, which symbolized the technical characteristics of soccer. However, these studies proposing the technical characteristics had some drawbacks. The relation among the elements in soccer was not described. It considered the elements of soccer from three viewpoints. First, the playing field was considered. The field is made of turf, artificial turf, or clay. Second, the means of playing the game was considered. There are rules, weather conditions, tools, and relation of all-opponent. Third, the soccer player was considered. In the game, player's abilities are said to include technique, tactics, mentality, and physical strength. These are the elements that interact with each other in the game of soccer. Based on this examination, this study redefined the technical characteristics in soccer.

Key words : Soccer, technical characteristic, Tactics, Techniques

1. 緒 言

一般的に学校体育の授業では、様々な運動・スポーツを用いて授業が展開されており、学習者は運動・スポーツのルールや技術、戦術などについて学んでいる。このような機能を有する学校体育について、丹下（1961）は「運動文化そのものを追求し、それを継承し発展させることを目的とした教育活動である」と述べている（丹下, 1961, p.144）。また、中村（1971）は体育を「『運動文化の継承・発展に関する科学を教える』」教科であると述べている（中村, 1971, p.55）。それに加え、岩田（2005）

はスポーツが「人間の『身体性』と『社会性』を軸にした『文化』であるところ」に特徴を有しており、そのスポーツを指導する体育は「広義な意味でのスポーツを内容とし、またそれを媒介にして営まれる教育活動でありうるのは、この文化性に基盤を置いている」ことであると述べている（岩田, 2005, p.70）。このように学校体育は、運動文化を学習者に享受させることが教科としての意義と考えられる。この点については、学校教育における授業が「ある文化内容を示して、子どもたちがそれを獲得する営み」とされている点から見ても（田中, 2007, p.2）、教科として成立するための重要な視点であるとも考えら

1. 北海道大学大学院
〒001-0011 札幌市北区北11条西7丁目
2. 北海道大学大学院教育学研究院
〒001-0011 札幌市北区北11条西7丁目

1. Graduate School of Hokkaido University
Kita 11, Nishi 7, Kitaku, Sapporo 001-0011
2. Faculty of Education, Hokkaido University
Kita 11, Nishi 7, Kitaku, Sapporo 001-0111

著者連絡先 佐藤 亮平
sato.ryohei.0317@hotmail.co.jp

れる。そのため、このような教科成立背景に立脚するのであれば、学校体育の授業は学習者が運動文化に関わる内容を認識・習得する必要性を有しているといえる。

このように、体育授業では運動文化に関する指導内容を提供するため、運動文化を理解する必要がある。そこで、体育指導における指導内容の中核的存在として考えられる技術や戦術の観点から運動文化の本質的把握を目指してきた学校体育研究同志会（1974）が提起している「技術的特質」の概念についてみてみたい。「技術的特質」とは、「それぞれの運動文化が持っている『面白さや持ち味』ということ」であり、「他の種目（教材）にないその種目独自の技術的な特性（本質）」である（荒木, 1974, p.53）。また、学校体育研究同志会（1974）は、この「技術的特質」を捉えない限り、「指導していくことは不可能に近い」と述べている（荒木, 1974, p.70）。この点を踏まえると、学校体育におけるサッカー指導において学習者がサッカー文化を理解するためには、「サッカーとは何か」というサッカーの独自性を明確に示していく必要がある。しかし、現状の学校体育におけるサッカー指導に関する研究では、そのような点を明確に示すよりも、TGfUの理論（Bunker and Thorpe, 1982）、戦術アプローチ（グリフィンほか, 1999）と呼ばれる指導理論を用いた授業実践や学習者に技術や戦術的能力を育むことを狙いとした教材研究に力点が置かれており¹⁾、「サッカーとは何か」という点については十分な検討がなされているとは言い難い状況にある。また、学校体育に対して法的拘束力を持つ学習指導要領では、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の3つに分類され（文部科学省, 2008, pp.83-85）、それぞれの種目を統合的に把握した指導が目指されているが、その統合的観点が競争課題を中心として分類が行われており、型に分類されている各種目が持っている独自の面白さや楽しさが十分に検討されていないことに課題がある。

以上のことから、現在の学校体育におけるサッカー指導は、「サッカーとは何か」という種目固有の面白さや楽しさといったサッカーの「技術的特質」について十分に検討されていないといえる。また、先に学校体育研究同志会が指摘していたように、この「技術的特質」が種目独自の面白さや楽しさを示す概念であるから、これが示されていないことは、サッカー指導の方向性や指導する内容を明確化するという点にも影響を与える。したがって、本研究ではサッカーの「技術的特質」を明確に規定している先行研究の成果と課題を明らかにした上で、サッカーの「技術的特質」を再規定することを研究目的とする。

2. 研究方法

研究方法は、先行研究において「技術的特質」を明確に規定している学校体育研究同志（1974, 1975）、サッ

カーの歴史的発展を検討し、その歴史発展の中核的内容を取り入れ、独自の技術的特質を規定している伊藤・竹田（2008）、サッカーの歴史的発展について検討し「技術的特質」について検討している佐藤・竹田（2011）を検討対象とし、これらの先行研究が示した成果と課題について検討する。そして、近年、「技術的特質」を規定する観点を示した竹田（2010）と規定方法を明確に示した近藤（2013）を参考に、サッカーの「構成要素」及び「競技構造」を明らかにする。そして、これら一連の検討結果に基づいて、サッカーの「技術的特質」を再規定する。

3-（1）. 学校体育研究同志会（1974, 1975）及び伊藤・竹田（2008）の成果と課題

学校体育研究同志会は、1960年代の体育において支配的であった体力づくり的な体育授業を批判的に捉え、体育を「単なる刺激-発達として部分部分の発達・向上という面からだけではなく、全人格に働きかける全人教育の立場」から、体育では「運動文化に関する科学」を学習する教科として位置づけている（荒木, 1974, pp.35-36）。そして、その運動文化を児童の発達や認識と照応するように「運動文化の特質を踏まえながら系統的に指導していく必要」と同時に「身体活動としての喜びを技術習得と併せて感得できるように指導していくことが重要」であるという指導の観点を持っている（荒木, 1974, p.44）。すなわち、そのスポーツ独自の面白さや楽しさを学習者が味わいながらも、技術習得をする重要性を主張しているということである。そして、サッカーの学習における楽しさや面白さといった「技術的特質」を「コンビネーションを含むシュート」と規定している（学校体育研究同志会, 1975, p.17）。

上記の学校体育研究同志会の規定は、コンビネーションを位置づけている点は評価できる。それは、サッカーの試合においてコンビネーションを用いない場面は、ほとんど存在しておらず、全てのプレーが味方の動きの連続として現れていると捉えられるからである。そのため、サッカーの特徴を表現しているといえる。

しかし、次の点に課題があると考えられる。それは、守備の規定を表現していない点である。サッカーには守備の局面が存在しており、そこにおける攻撃と守備の攻防もサッカーの面白さや楽しさに位置づける必要があるといえる。そのため、サッカーの「技術的特質」には守備局面における規定を位置づける必要があると考えられる。

次に伊藤・竹田（2008）は、サッカーの「技術的特質」を規定する際に、サッカーの歴史的発展について検討している。その結果、伊藤・竹田（2008）は、サッカーの歴史的発展の要因を「フリースペース」にあると捉えた上で、サッカーの「技術的特質」を「システムにおける自分の役割の認識と、フィールド上において相手からプレッシャーを受けず自由にプレーすることのできる『フ

リースペース』の奪い合い」と規定している（伊藤・竹田, 2008, p.250）。

上記の伊藤・竹田（2008）の規定は、「リースペース」という概念を「技術的特質」に位置づけ、提起している点は評価できる。それは、サッカーにおいてスペースは、常に生成と消滅を繰り返すものであり、プレーを実施するためにはスペースができる一瞬を逃さずプレーすることがサッカーの特徴として考えられるからである。また、伊藤・竹田（2008）は、学校体育研究同志会（1974, 1975）が提起しているコンビネーションという規定をより戦術論的なレベルの用語である「システム」として表現している点も評価できる。それは、コンビネーションという表現では、サッカーのプレーに直接的に関わる部分のみの規定になっており、それをシステムといった拡大した概念を用いることによって、ボールに直接的に関わっていない選手にも面白さや楽しさがあることを表現し、それが指導を行う際の重要な視点ととられることができるからである。

しかし、伊藤・竹田（2008）の規定では、次の点に課題があるといえる。それは、ルールによって競技を実施する空間が設定されことを踏まえると、ルールとプレーすることができるスペースには関係性が存在しており、その点について言及がないことである。すなわち、サッカーという競技の構成要素の関係性が明確になっていない点に課題が残されている。また、この規定では「リースペース」がサッカーの競技特性と捉えられるが、サッカーは本来的には得点をめぐり攻防を展開する競技である。そのため、得点をめぐる攻防といった表現が無い点にも課題があると思われる。

3- (2). 佐藤ら（2011）の技術的特質の規定の成果と課題

佐藤・竹田（2011）は、学校体育研究同志会（1974, 1975）及び伊藤・竹田（2008）の検討とサッカーの歴史的発展について検討し、サッカーの技術的特質を「主に足でボールを操作し、攻撃側は、チームとして『重要空間』にボールを選びそこからのシュートを目指す。守備側はそれを防ぐ」と規定している（佐藤・竹田, 2011, p.227）。

このように佐藤・竹田（2011）の規定は、サッカーが足を用いてプレーすることに着目し、サッカーの面白さや楽しさに足という表現を入れて捉えることにより、先行研究との違いを示している。

しかしながら、佐藤・竹田（2011）の規定では、守備の面白さに関する規定に課題があるといえる。それは、守備には、シュートを防ぐというプレー以外にもボールを奪い攻撃権を奪回するという積極的なプレーも存在しているからである。さらに、『重要空間』という空間設定をしているが、これは先の伊藤・竹田（2008）と同様にどのようにルールと関係しているかが不明確な点に

についても再検討する必要がある。

以上のように、先行研究における成果と課題について検討してきた結果、サッカーの技術的特質として、「システム」といったチームレベルでの楽しさを表現すること、「足」でプレーするといった点を示してきたことが成果として挙げられる。

一方で、「技術的特質」を規定するためには、サッカーを構成している要素について検討し、それらがどのように関係しているかを把握した上で、提起する方法が必要であることが課題として残されていると考えられた。

4. サッカーの競技構造

ここでは、先行研究の成果と課題を受けてサッカーの「技術的特質」について再検討していくが、その際に、竹田（2010）が示してきた「技術的特質」を規定する要素からサッカーについて検討し、サッカーの「技術的特質」を構成する要素について検討していく。その検討を踏まえ、近藤（2012）が示してきた要素間を把握するカテゴリーに分類し、その関係性について論述する。そして、サッカーの「技術的特質」を再規定する。

竹田（2010）は、「技術的特質」が「働きかける世界（対象）」「使用する道具（物的手段）」「運動そのものの目的」の3要素から規定されることを示している（竹田, 2010, p.12）。まず、「働きかける世界（対象）」とは、運動において主体が働きかける環境世界であり、サッカーではフィールド上で主体がプレーを行うために働きかけるフィールドの諸特徴を明確に把握することである。次に「使用する道具（物的手段）」とは、先の「働きかける世界」において、主体がプレーをする際にどのような道具を用いて行動をするのかということである。サッカーにおいては、ルールや靴、ボール、ゴール等といったものが「使用する道具（運動手段）」として位置づけられる。最後に「運動そのものの目的」とは、対象となるスポーツが何を主たる競争課題としているかということであり²⁾、サッカーでは決められた試合時間の中で如何にして相手チームよりも多く得点を奪うかという得点をめぐる攻防が位置づけられる。このような竹田（2010）の指摘を踏まえ、サッカーを構成する要素を把握すると表1のように整理される。

サッカーにおける「働きかける世界（対象）」として、「フィールド」「他者」「天候」を位置づけた。「フィールド」については、サッカーの試合を行う場所として不可

表1 サッカーの構成要素

項目	内容		
働きかける世界（対象）	フィールド	他者	天候
使用する道具（物的手段）	ルール	ボール	靴
	ユニフォーム	キーパーグローブ	ゴール
運動そのものの目的	得点		

欠なものであり、フィールドが無ければ試合を行うことが困難であることから窺える。「他者」については、サッカーの試合には味方や相手が存在しており、そのような「他者」と協働あるいは競争するという関係に影響を受けながら勝敗を競っていることからここに位置づけられる。そして「天候」は、サッカーが主に屋外で行うスポーツであることを踏まえると、「天候」という自然現象、すなわち自然界への働きかけを主体が行っているため位置づける。次に「使用する道具(運動手段)」として、「ボール」「靴」「ユニフォーム」「キーパーグローブ」「ゴール」といった競技者が使用するものと、競技を成立させるための「ルール」を位置づけた。そして、「運動そのものの目的」として、これまでの先行研究³⁾で示されてきたようにサッカーは得点をめぐって攻防が展開されることから、サッカーの主たる競争課題として「得点をめぐる攻防」を位置づけた。この「得点」については、鈴木ら(2010)が示すように、主たる競争目的ではなく競り合いの結果を数量化したものであるというような指摘(鈴木ら, 2010, pp.139-140)もなされている。しかし、先行研究が示してきた成果や、競技者のプレイには1つの局面を突破するというだけでなく、そのプレイの根底には最終的に「得点」というものが関わりながら存在していることは自明であり、これを無くしてサッカーという競技は成立し得ないことを踏まえるとサッカーにおいて「得点」というものは「運動そのものの目的」といえる。この点については、進藤(2008)が示すように、侵入型競技の競技目的⁴⁾が「ゴール内にシュートするかまたはエンドライン内のエリアにグラウンディングするか持ち込むかによって得点すること、及び、その阻止というところにある」としている点からも窺える(進藤, 2008, p.8)。

このように、竹田(2010)が示した「技術的特質」の規定方法について検討してきたが、この方法によって位置づけられた各要素がどのような関係性にあるかについては、明確に把握することができないことを踏まえ、次にこれらの要素の関係性について検討するため、近藤(2012)が規定する方法論についてみていきたい。

近藤(2013)は、「技術的特質」を規定する際に金井(1977)の身体運動過程及びスポーツ過程に関する構造論に依拠し、対象となるスポーツの「競技構造」を把握している(近藤, 2013, pp.16-17)。この金井(1977)が示してきた構造論では、人間の身体運動過程が「自然的あるいは人工的に存在する運動対象に対する能動的・積極的な働きかけを前提にしている」ことを踏まえ、その運動対象とそれに働きかける人間との間に「運動手段」があることを示している(金井, 1977, pp.135-137)。これを整理すると、「運動対象」「人間(主体)」「運動手段」という3つが身体運動過程には存在しており、スポーツ過程も「運動対象」「運動主体」「運動手段」という3つが存在していると述べている(金井, 1977, pp.137-

139)。このような、金井(1977)の論述を受けて近藤(2012)は、スポーツ過程における「運動手段」をより詳細に分類し、身体運動機能や技能等の「主体的手段」、ルール・自然的手段・道具的手段の「客観的手段」に大別して捉え、その「客観的手段」においても「非物質的手段」にルールを位置づけ、「物質的手段」に自然的手段・道具的手段に位置づけ、分類している(近藤, 2013, p.16)。そして、近藤(2013)は、「競技空間」「競技主体」「運動手段」は相互関連しているものとして捉えている⁵⁾。

金井(1977)と近藤(2013)が示してきたスポーツの過程を構造的に把握してきたが、この構造に先の竹田(2010)の指摘によって導き出されたサッカーの構成要素をそれぞれ「競技空間」「競技主体」「運動手段」に位置づけると、図1のように整理できる。

まず、「競技空間」には、フィールドが位置づけられる。このフィールドも芝生であるとか人工芝、土ということが想定され、芝の場合はその長さなどの特徴もあるといえる。また、このフィールドには「他者」というものが存在している。それは、後述する「ルール」との関わりにおいて、「競技主体」にとって味方や相手になる存在である。この「他者」には身体的手段として、年齢、性別、体格、体力といった身体の機能的側面と精神的手段の心理という精神的側面を有しているものと捉えた。そして、実際にプレーを行う事を想定し、技術・戦術的手段として、状況把握、技術・戦術的能力を位置づけた。さらに、サッカーは基本的に屋外で競技が行われるため、天候の影響を受けるスポーツであることから「天候」として天気、気温、湿度、風を位置づけた。「運動手段」には、ルール、道具的手段が位置づけられる。ルールに関しては、国際サッカー評議委員会によって制定された『サッカー競技規則2016/2017』に基づきゲームが行われている。そして、プレーヤーはユニフォームやスパイクといった用具を身に付け運動を行うことから道具的手段を位置づけ、ボール、靴、ユニフォーム、キーパーグローブ、ゴールを位置づけた。「競技主体」には、「他者」と同様に主体的手段を位置づけている。

このように、「競技空間」「運動手段」「競技手段」のそれぞれに該当すると考えられる要素を位置づけたが、これらが具体的にどのような関係性を有しているかについて検討していく。まず、サッカーの試合はルールに則り試合が行われる。ルールを明文化している『サッカー競技規則2016/2017』を見ていくと、第1条に競技のフィールドについてのルールが項目化され、フィールドの大きさなどについて記載されている(日本サッカー協会, 2016, pp.18-20)。そして、第2条にはボール、第4条には競技者の用具について項目化され、ボールの形状や(日本サッカー協会, 2016, pp.28-32)、ユニフォームに関わる規定などが記載されている(日本サッカー協会, 2016, pp.40-44)。それに加え、競技時間も第7条に設定されており(日本サッカー協会, 2016, pp.60-64)、

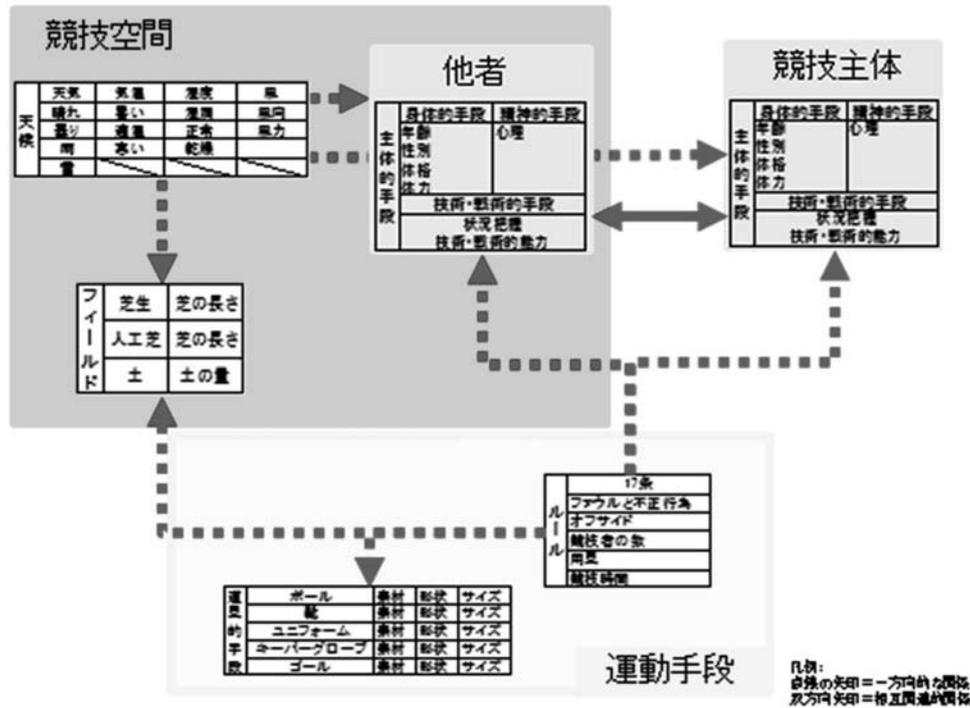


図1 サッカー競技構造

この競技時間内はフィールドが「競技空間」としての役割を担う空間になる。このように、ルールが「競技空間」や道具的手段に影響を与えている事が理解できる。また、「競技主体」や「他者」にも第12条にファウルと不正行為という項目があることから、プレーについてもルールが影響を与えているといえる(日本サッカー協会, 2016, pp.80-90)。このように、「運動手段」におけるルールは「競技空間」「競技主体」との関係性を有している。

次に「競技空間」と「競技主体」の関係をみると、サッカーの試合は「競技空間」の中で行われるものであることを踏まえると「競技主体」は、「競技空間」に働きかけてプレーしている。また、「競技主体」はフィールドの芝が長いあるいは短いといった点を考慮しながら自己の持っている技能を適正に行使しなければならない。この点は、「天候」が合わさった例だとわかりやすい。例えば、雨が降っているという天候の中で、競技主体は水たまりあるいは芝生が濡れていることを理解した上でボールの滑り具合などを考慮しながらプレーを展開しなければならないということである。また、「競技空間」には「他者」が存在しており、この他者と得点をめぐって攻防していることを踏まえると、「競技空間」と「競技主体」にも相互関連があるといえる。

最後に、「競技主体」と「運動手段」についてみると、ルールに関しては先にも述べたように、プレーの面での影響を与えている。次に、道具的手段との関係は、ボール、ユニフォームなどをただ着用するといっただけではなく、「競技主体」は「天候」との関わりの中で用具を選ぶことが求められる。それは、雨でフィールドがぬか

るんでいる状況では、靴とりわけ競技スポーツにおけるサッカーシューズは固定式ではなく取り替え式のものを着用し、気温が低ければアンダーシャツを長袖あるいは保温性の高いものを着用し、体温の低下を防ぐことが「競技主体」には求められるという関係性が存在しているということである。

5. サッカーの技術的特質の再規定

先にみたように、サッカーという競技は、「競技主体」が「運動手段」における中身を媒介として、「競技空間」に働きかけることにより競技が成立する構造を有している。つまり、サッカーという競技は、ルールによって時間的・空間的規制をうけたフィールド上で、競技主体は天候や用具、相手や味方選手と協働しながらプレーをする競技であるということである。また、先行研究の成果と課題において示した「システム」というものは、競技構造における「競技主体」と「他者」を結び付ける概念であることを踏まえると、その関係性を示した用語であるために「システム」という用語を取り入れる必要があるといえる。また、サッカーのプレーは「足」でのプレーが大部分を占める競技であることを踏まえると「足」という用語を取り入れる必要があるといえる。

以上のことを踏まえ、本研究ではサッカーの「技術的特質」を「ルールによって制限された空間内で、時間的・空間的な状況やフィールドの特性を考慮しながら、主に足を用いてボールを操作し、相互のシステムに対応した技術・戦術を個人的・集団的に使用しながら試合時間内

での得点を目指し、攻防を展開すること」と規定する。

まとめ

本研究では、サッカーの技術的特質に関する先行研究の成果と課題について検討し、従来の規定では十分にサッカーを構成する要素及びその関係性が把握されていない事を示し、サッカーの「技術的特質」が「ルールによって制限された空間内で、時間的・空間的な状況やフィールドの特性を考慮しながら、主に足を用いてボールを操作し、相互のシステムに対応した技術・戦術を個人的・集団的に使用しながら試合時間内での得点を目指し、攻防を展開すること」と規定できると結論づけられた。

今後の課題

サッカーの技術的特質は、その本来的な意味を考えた場合、サッカーの学習者に教授されるべき内容であることを考えると、このようなサッカーの面白さや楽しさを味わえる指導理論の構築が求められるといえる。また、学校体育が「型ベース」の教育になっていることを踏まえると、サッカーと同じ「ゴール型」種目に属する他の種目の技術的特質についても検討することが、学校体育から要求されると考えられる。

注

- 1) サッカーの先行研究においては、拙論ではあるが佐藤・近藤（2015）に記載されている先行研究を参照した。
- 2) 竹田（2010）が指摘する「運動そのものの目的」といった概念は、広範な意味を内包する概念である。そのため、本稿では竹田（2010）が示した「運動そのものの目的」をサッカーの競技特性やゲームの理念あるいは競技の目的といった大枠の競争課題を示すものとして捉える。
- 3) 先行研究におけるサッカーの競技特性については、JFA技術委員会（2012）が「ゴール奪うために、ボールを失わずにゴールに向かうこと」と「ゴールを守り、ボールを奪い返し攻撃すること」を挙げていること（JFA技術委員会, 2012, p.21）や、シュティラーほか（1993）が「それぞれ、11名からなる二つのチームが、105m×70mのフィールドの中で一個のボールを敵のゴールに入れること、および敵のゴールを阻止すること」とゲームの理念を規定しているように（シュティラーほか, 1993, p.213）、得点をめぐる攻防が主たる競争課題であることを示している。また、学校体育研究同志会（1974）においても、球技の技術的特質は「得点の様式」から規定されるという指摘から、サッカーにおいても得点

の攻防が主たる競争課題であると本稿では考える。

- 3) 進藤（2008）は、球技における侵入型の技術的・戦術的課題を競技目的と競技目標に分けて示している。競技目的は、ゲームにおいて何を競っているかという競争の目的を示した内容であり、競技目標は目的を達成するための具体的な方法が示されている。このように進藤（2008）は、目的と目標に概念を分けて論じているが、それぞれの概念に得点について記述している。本稿では、鈴木ら（2010）が指摘する内容が、進藤（2008）の示した競技目標のカテゴリーに位置する研究として捉えた上で、本稿における「運動そのものの目的」は、進藤（2008）の指摘する競技目的の論旨が合致していると判断し、進藤（2008）の論旨を首肯する。
- 4) 近藤（2013）は、金井（1977）の「運動対象」「運動主体」を同義で「競技空間」「競技主体」と言い換えて使用している（近藤, 2013, p.18）。

文 献

- 荒木 豊（1974）第2章内容・技術. 学校体育研究同志会編, 体育実践論. ベースボールマガジン社. pp.35-82.
- Bunker, D and Thorpe, R. (1982) A model for the teaching of games in secondary schools. Bulltin of Physical Education, 18 (1) : 5-8.
- 学校体育研究同志会編（1975）サッカーの指導. ベースボールマガジン社.
- 伊藤 烈・竹田唯史（2008）サッカーにおける初心者を対象とした指導理論について. 北海道浅井学園大学生涯学習研究所紀要（11）: 247-262.
- 岩田 靖（2005）技術指導からみた体育. 友添秀則・岡出美則編, 教養としての体育原理—現代の体育・スポーツを考えるために—. 大修館書店, pp.70-77.
- 金井淳二（1977）スポーツ技術論の諸問題. 立命館大学人文科学研究所紀要（25）: 111-147.
- G.シュティラー・I. コンツァックH.デーブラー: 唐木國彦監訳（1993）ボールゲーム指導事典. 大修館書店.
- 公益財団法人日本サッカー協会（2016）サッカー競技規則2016/2017. http://www.jfa.jp/documents/pdf/soccer/lawssofthegame_201617.pdf（参照日2016年6月28日）
- 近藤雄一郎（2013）アルペンスキー競技における技術・戦術指導—初級者及び中級者を対象とした教授プログラムによる実証的研究—. 中西出版.
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領. 東山書房.
- 中村敏雄（1971）学校体育は何を教える教科であるか—高校の体育指導を考える. 体育科教育, 19（8）: 53-56.

- 佐藤亮平・近藤雄一郎 (2015) 学校体育におけるサッカーの指導の教育内容と教材の変遷に関する一考察. 北海道体育学研究 (50) : 81-91.
- 佐藤亮平・竹田唯史 (2011) サッカーの戦術と現代サッカーの戦術. 日本体育学会体育方法専門分化会会報 (37) : 225-228.
- 進藤省次郎 (2008) 球技の本質とは何か. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 104 : 1-16.
- 鈴木 理・青山清英・岡村幸恵・伊佐野龍司 (2010) 価値体系論的構造分析に基づく球技の分類. 体育学研究, 55 : 137-146.
- リンダ・L・グリフィン, ステファン・ミッチェル, ジュディ・オスリン:高橋健夫・岡出美則訳 (1999) ボール運動の指導プログラム—楽しい戦術学習の進め方. 大修館書店.
- 竹田唯史 (2010) スキー運動における技術指導に関する研究—初心者から上級者までの教授プログラム—. 共同文化社.
- 田中耕二 (2007) 1 授業という世界. 田中耕二編, 『よくわかる授業論』. ミネルバ書房, pp.2-3.
- 丹下保夫 (1961) 体育原理 (下). 逍遥書院.
- JFA技術委員会監 (2012) サッカー指導教本2012JFA 公認C級コーチ. 公益財団法人日本サッカー協会.

{平成28年4月17日 受付}
{平成28年8月24日 受理}